



新世紀のキャンパス
Campus of New Century

甲南大学 西宮キャンパス CUBE



外観の形が、そのまま学部とキャンパスの愛称になった「西宮キャンパスCUBE」。



「CUBEアトリウム」は300インチの映像を投影できるプロジェクタを設置し、多目的スペースとして使用。



ユニバーシティカラーであるエンジ色のプロジェクトルームが映える。

甲南大学は2009年4月、新キャンパスの西宮キャンパスを開校、新学部「マネジメント創造学部」を同キャンパスで開講した。大阪と神戸のちょうど中間地点で再開発の進む西宮エリアは、大阪方面進出への足がかりとしての期待もある。

新キャンパスの建築と新学部の設置の2つを総称して進められた“CUBEプロジェクト”。総合大学として学部ラインアップをそろえる同大が、あえて新学部を設置したのは、教職員の間で長年あった“学生主体の教育を本気で実現できないか”という問題意識からだった。西宮キャンパス事務室の石野牧生課長は、「研究者を育てるのではなく、社会に出て本当に役立つ能力は何かを考えた。本学の卒業生が社会に出ていくなかで、苦境に立った時でも、自分をマネジメントできる能力が、今求められている。学部名はマネジメントにはこの意味が込められている」と語る。そのための武器として、英語、ITリテラシー、そして、経済・経営を中心に社会を学ぶというコンセプトが決まったという。

新しい学びの試みとして、従来の基礎・専門科目、演習、卒業研究という積み上げ型教育ではなく、1年次で英語科目などの基礎を学んだあと、2～4年次までは少人数のチームに分かれ、グループワークやフィール

ドワークを主としたプロジェクト型学習をカリキュラムの中心とした。基礎リテラシーは1学年を4つのクラスに分け、1クラスを複数の教員が担当する授業で、きめ細かい指導を行う。プロジェクトについても、同じ教員のもと1つのテーマを長く研究するゼミではなく、あえてプロジェクトとした。半期や通年という短いスパンで、テーマや教員も変えながら、研究を行い成果を発表するというサイクルを繰り返すことで、実社会につながる教育を目指す。

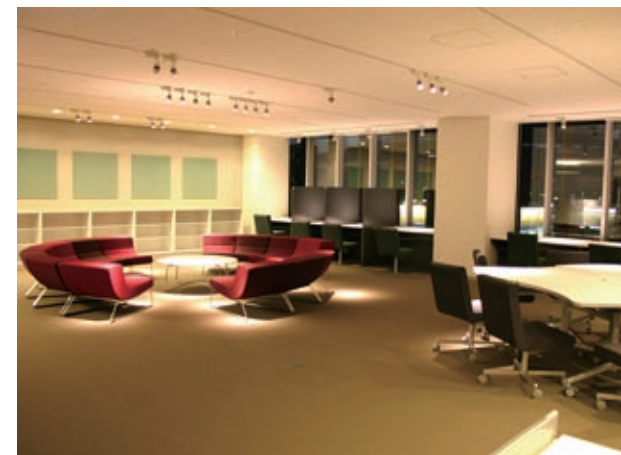
設備面では教室、プロジェクトルーム、教員研究室はすべてガラス張りにし、



7-9Fのプロジェクトエリアの様子。手前が学生ラウンジ、吹き抜けをはさんで奥が教員の研究室とラウンジと、お互いが見えるようにした。

見える化で教員の授業に対する意識を高めている。英語教育では、マネジメントコースの学生は週5コマ、特別留学コースの学生は週10コマのネイティブ教員による授業を受け、「英語オンリーゾーン」で実践力を磨く。ITについては、キャンパス全体を無線LAN環境にし、学生全員にノートパソコンと携帯電話を持たせ、講義やプロジェクトに使用する。また携帯電話は館内の設備とリンクさせ、教室やロッカーの解錠、パソコンログインなど、キャンパスライフのすべてをIC管理している。

(取材・文／本誌能地)



会話や掲示などすべてが英語の「英語オンリーゾーン」で、ネイティブ教員とコミュニケーション。



ガラス張りの教室では、中でどんな授業が行われているのかがよくわかる。



「基礎リテラシー」では、グループワーク形式でクラスごとに競い学ばせる。



パソコン教室もガラス張りだ。



ICロッカーにパソコンや教科書を置き、宿題を大学で終わらせて帰宅するというスタイルも生まれた。